

研究・調査報告書

報告書番号	担当
275	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名 (原題/訳)	
Late-life alcohol consumption and 20-year mortality. 老年期アルコール消費と20年間の死亡率	
執筆者	
Holahan CJ, Schutte KK, Brennan PL, Holahan CK, Moos BS, Moos RH.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Clin Exp Res. 34(11):1961-1971(2010)	
キーワード	
アルコール、アルコール消費、問題飲酒、加齢、死亡率	
要旨	
背景： 中等度のアルコール消費は中年ならびに老年成人での総死亡率を低下させることと関連していることを示す疫学的事実が増えつつある。しかし、中等度飲酒の有益な効果は交絡因子によって、多分に過大評価されていると思われる。疫学研究で対照とされる非飲酒者には健康に問題のある過去に飲酒したことがある人が含まれている可能性があり、また社会人口統計的要因や社会・行動的要因の点で非飲酒者が飲酒者とは異なっている場合が含まれていると考えられる。この研究の目的は、非飲酒に関連した様々な交絡因子を補正して、1,824名の老人で20年間のアルコール消費と総死亡原因との関連性について検討することである。	
方法： 標本データは55～65歳の1,824名であった。データベースとしては、1日のアルコール消費量、社会人口統計的要因、過去の問題飲酒状態、健康要因、社会・行動的要因に関する情報である。非飲酒の定義は調査開始時点でアルコールを禁酒していることとした。20年の追跡期間中の死亡は基本的に死亡証明書で確認した。	
結果： 年齢と性別のみを調整して中等度飲酒者を基本に比較した場合、非飲酒者は死亡危険性で2倍以上の上昇、重度飲酒者で1.7倍の上昇、軽度飲酒者で1.2倍の上昇が認められた。年齢や性別と同様に、過去の問題飲酒の状態、健康問題、重要な社会人口統計的あるいは社会・行動的要因を補正したモデルでは中等度飲酒者と比較した非飲酒者の死亡率に関する効果は実質的に低下が見られた。しかし、全ての交絡因子を補正した後でさえも中等度飲酒者と比較して、非飲酒者ならびに重度飲酒者の死亡危険率はそれぞれ51%と45%に依然として上昇していた。	
結論： この研究の知見は、非飲酒者と比較した際、中等度飲酒者で見られる死亡率低下効果に対する解釈には、非飲酒者に伴う交絡因子に関連した効果はかなり関係していることを示している。しかし、それらの典型的あるいは非典型的な交絡因子を考慮した後でも、一貫して、中等度の飲酒は死亡危険率を低下させ有益な効果をもたらすことを示している。	